

気 持 ち

滋賀県

八幡西清流館道場

中学3年 奈良原 咲 菜

中体連夏季予選ブロック大会前の稽古で先生が言った。「あとは気持ちだから。」その言葉は、私の胸にすっと入るとともに、私の決意をさらに熱くした。気合が入っている。とてもありきたりな言葉だが、この言葉がびったりくる。私は、私たちは、中学三年生だ。コロナ禍で、いつ次の大会が中止になるかわからない状態の部活生活だった。中止になった大会もあった。部活ができない日々も続いた。稽古再開で、仲間と一緒に剣道をできる大切な時間を知った。勝ち上がる、個人戦も団体戦もブロック予選で優勝をする、県大会で優勝をする！目標を持っていた。そして、その中体連もこの夏季大会で最後だ。

気持ちは一つの原動力だ。物理的な体力もまたそうである。しかし、目に見えない気持ちは、今備えている体力や技術を予想もしない方へ導くこともある。流れだ。気持ちは、流れを生み出す。時には、黒い渦のように、今までの稽古をいとも簡単にひっくり返す長く重い時間の流れを。時には、頑なにぶれない熱い心を突き動かす真っすぐな流れを。

ブロック予選の日がやってきた。会場は幸運にも私たちの中学校の体育館だ。毎日過ごした見慣れた体育館のはずなのに、手を伸ばしたドアが重い。緊張が止まらない。私の中で、緊張という得体のしれない生き物がどんどん大きくなって私を飲みこんでしまいそうだ。私は、自分に何度も言った。「次はない、次は存在しない。絶対に後悔はしない。全力を出し切る。予選で優勝をして県大会へ行く。私はここで絶対終わらない。」と。たくさん込み上げる思いを胸に、今にも消えてしまいそうな心の種火を絶やすまいと必死だった。自分の心臓の鼓動が速くなっていく。個人戦で試合を待っている間、周りの音が聞こえているのだが、全部通り過ぎていく。心臓の速くなっていく鼓動だけが、はっきりと聞こえていた。初戦から二試合目、三試合目と勝ち進んだ。私の中で、次の四試合目が決勝進出の大きな鍵となる試合だった。私は一度も決勝に進んだことがなかった。いつも準決勝で負けていた。先生の言葉を思い出した。気持ちだ。気合を入れろ！こんな黒い渦に負けていられない。私は自分の心に火をつけた。四試合目も勝利をつかみ取った。次は決勝だ。初めての舞台だ。決勝に進めた喜びと、次も勝つという強い気持ちが入り混じり、緊張という黒い渦を打ち消すかのように、私は自分の面ひもをぎゅっと縛って立ち上がった。その瞬間、頭の中が真っ白になり、目に映る景色がどこか他人事のように映りだした。黒い緊張の渦は、お構いなく私にまとわりついた。その時だ。バンっと私の背中を誰かが叩いた。「絶対勝てよ。」聞きなれたいつも怒鳴っているあの声だ。先生が私のもとに来てくれたのだ。いつものあの口調の「絶対勝てよ。」という先生の言葉は、消えかけそうだった私の心の種火に火をつけた。周

りを見渡すと、仲間が応援してくれている。私の気持ちが流れを作った。仲間の拍手、先生の声すべてが私の強い味方だと思えたその時、勝てるという自信さえあふれ出てきた。私の小手が決まった瞬間、みんなの拍手がはっきりと聞こえ、決勝戦は私の一本勝ちで幕を閉じた。「たくさんの気持ち」が、私を勝利へと導いてくれたのだ。

剣道では、「気剣体」という言葉がある。「気」とは氣勢。絶対に勝つという気持ち。「剣」とは稽古などで身につけた技術。「体」とは姿勢や足さばきのことである。これら三つの要素が一致しなければならぬとこれまで先生から何度も教わってきた。私は、いつも変わらない結果だった。長いトンネルの中をさまよいつづけていた。でも、今回はトンネルを抜け出す光が差し込んだ。この光は、気持ちだ。私はこれからも何度もトンネルをさまようだろう。剣道は私を強くしてくれる。剣道を通して、私はこれからも前に進んでいきたい。